

哲学カフェ de ぎふ

せんしゅう

千秋まちかど文庫 通信



運営委員会発行(記録:安藤彰浩、編集:中川健史) (主宰:吉田千秋 090-7917-9602 yoshida0@sepia.ocn.ne.jp)

第170回哲学カフェ例会(2022.8.11)14周年記念講演会&討論会 記録

《危機の時代に平和を考える》



<開会の言葉> 主宰者: 吉田千秋

この哲学カフェは14年活動を続けることができました。この間、コロナ禍で何回か例会の中止を余儀なくされ、創設記念行事も2年間できませんでした。それでも多くの人に投稿して頂いて、「通信」は毎月一度の発行を継続し(全部で169回)哲学カフェの活動が停止することはありませんでした。この場を借りて哲学カフェの活動に協力いただいた全ての方に、改めて感謝します。

さて、今年2月24日世界を驚愕させる事件が起こりました。ウクライナに対するロシアの軍事侵攻です。ロシアによる首都攻略失敗後、話し合いの試みがありましたが、成果をもたらさず、その後戦闘は激化するばかりで、停戦の見通しは完全に立たなくなっています。

ロシアに非のあることは明らかですが、世界の政治経済に対するこの戦争の影響は甚大で、犠牲を最小限に抑え、できるかぎり早く闘いを終わらせることが、世界の多くの人の願いであり、最善の道だと思います。

この機に乗じ、自公政権は専守防衛の枠を超えた軍拡、特に自衛隊の敵基地攻撃能力の強化をはかり、改憲ももろんでいます。これが平和への道とは思えません。今こそ憲法の精神を活かす道を探る努力が求めら

れています。

今日お迎えした宇宙物理学者の池内さんは、以前より、専門分野の研究に留まらず、科学技術の知識を平和に活かすという観点から、大学における研究成果、科学技術の軍事利用にも警鐘を鳴らして来られました。今回のウクライナの危機に関しても、独自の考えを持っておられ、新聞のコラムなどで意見を表明されています。今回は、池内さんから世界歴史の発展を文明と野蛮の相克史という独自の観点の歴史観から、危機の時代にあつて、日本を含む世界の平和のあり方について語って頂きます。



＜講演＞ 池内 了さん 「ウクライナ侵攻から平和を考える – 歴史の順行と逆行 –」

4年前に一度お話しさせて頂きました。宇宙物理を専門としているからなのでしょうか。宇宙から地球を見たらどのように見えるのか、地球上の出来事を遠くから離れて見た場合、何が見えるのか。哲学と呼ぶのはおこがましいのですが、あくまでも、科学者の立場における私的見解と言うことで話しをさせて頂きます。

* 世界の歴史は「文明」と「野蛮」の相克史 = 非戦軍縮の歴史

見当違いという批判があるかもしれませんが、私は歴史を「文明」と「野蛮」の相克の歴史と捉えることにしています。文明の建設と破壊を繰り返して来ました。平和な生活の中で何かを作り出し、築き上げ、戦争などでそれを破壊する。時間的に見ると、歴史は、行ったり来たり、進歩と後退、天文学の表現を借りるならば、「順行」と「逆行」を繰り返している様に見えます。それでも世界は長い目で見ると、ジグザグはあるが、野蛮を制限しようという好い方に変わっていると思います。戦争放棄を強調する憲法9条はそういう歴史の順行と逆行における進歩の証です。

文明の方へ真っ直ぐに進むかと思うと、野蛮に後退する。世界の歴史はその様な前進と後退を繰り返しながら、少しずつ前に進んでいます。暴力と破壊による究極の野蛮である戦争が繰り返されてきましたが、全てが許されると考えていた訳ではありませんでした。暗黙の了解事項があって、戦争の仕方には制限がありました。19世紀後半以降、戦争が繰り返され、野蛮がエスカレートしている印象がありますが、戦争する者たちの間で守られるべき事柄を国際的にルール化する試みも繰り返されてきました。特定の武器を禁止する条約が何度も締結されました。そのもっとも新しい努力が昨年正式に発効された“核兵器禁止条約”です。

非戦及び軍縮の歴史を少し跡付けてみましょう。世界初の国際人道法と呼ばれるサンクトペテルブルク宣言(1868年)では、戦争において不必要な苦痛を避けるためにルールを定める試みがなされました。気球爆弾や毒ガスやダムダム弾の様な残虐な兵器を使用禁止にするハーグ陸戦協定(1907年)が結ばれました。残念ながらその後、第一次世界大戦で使用された毒ガスが悲惨な結果をもたらして、改めて捕虜の扱いや毒ガス兵器の禁止を定めたジュネーヴ協定(1925年)が締結されまし



た。現在、AIの発展で、技術的には攻撃の判断を完全にAIに委ねることが可能となっています。既にこうしたAIを用いた兵器を禁止する条約作りの動きが出ています。新しい兵器が開発され、それを制限ないし禁止するルールが生まれる。上記の“核兵器禁止条約”は肝心の核兵器保有国が加わっておらず、それでは意味が無いと思う人たちもいるでしょう。しかし、このような条約があることは条約を批准していない国にも無言の圧力になると思われれます。何時も条約を無視する国があります。それでも禁止条約があれば、どの国でもその対象になる兵器をおおっぴらに国際的な約束事を無視して使うことはできません。ルールを作って悪いと思わせることが重要です。

* 世界史は「順行」と「逆行」の繰り返し

世界史の「順行」と「逆行」の繰り返しは人間(政治家)の意識と行動の「順行」と「逆行」の表れにほかなりません。人々は、通常、できるかぎり危険を伴う事態を回避しようとし、対立や紛争が起こりそうな事態において、時間をかけてでも交渉や説得や取引(ディーリング)を通じて事を収めることがより賢明と考えます。これが歴史の順行に相当します。例えば、1791年フランス革命の中で作られた最初の憲法の6篇第1項において「征服を行う目的でいかなる戦争を企図することを放棄し」と宣言されています。1899年列強間で締結されたハーグ条約は、国際紛争を武力ではなく、話し合いと交渉によって公平かつ誠実に処理解決することを謳っています。しかし1914年、第一次世界大戦という未曾有の大戦争が起こってしまいました。1920年、戦争の悲劇を繰り返さな

いことを目的として、国際連盟(the league of nations)が設立されました。1928年には戦争放棄を定めるパリ不戦条約が結ばれました。周知の様に、こうした努力にかかわらず第二次世界大戦を回避することはできませんでした。二度と大戦争を起こさないという決意から、戦争の違法化を訴える憲章を持った国際連合(the united nations)が組織されました。1947年、敗戦国日本で戦争放棄を上げる日本国憲法が生まれました。1949年、コスタリカで軍隊の不保持を定めた憲法が制定されました。同じ様に憲法を通じて戦争をしないことを宣言した日本とコスタリカですが、この二カ国には大きな違いがあります。日本の指導者はあからさまに戦争放棄を謳う憲法を軽視しているのに対し、コスタリカは戦争をしない国を作ることを誇りに思っている事です。

*** 日本国憲法の平和主義の意味**

日本国憲法を通じて日本は国として二度と侵略国家にならないことを宣言しています。憲法が政治の在り方を定めるとするのが立憲主義の立場です。個人として政治家が何を考えようと政治家は憲法に従う義務を負っています。しかし、ただ憲法を定めることで何かが実現されるわけではありません。憲法が定める政治(平和の実現)は、国民の不断の努力によって実現しなければならないものです。

平和も制度として既にあるものではなく、常に国民が頑張って実現されなければならないものです。正にそこに平和主義の意義があります。ウクライナの悲劇を例に、憲法9条で平和が守れるのかと批判する人たちがいます。憲法9条が国を守るかどうか議論することは見当違いなことで、日本が侵略国にならないことを定めたことにこそ憲法9条の意義があります。

*** 世界史の順行ー戦争が絶えないようにも思えるが実は..**

世界は全体として戦争が無くなる方向に進んで来たと言えないでしょうか。数多くの戦争、武力衝突が起こっているという印象があります。しかし第二次世界大戦後大国間の大きな戦争は起きていません。大国は戦争で互いの間にある問題を解決できないと認識しているからです。実際に起きた戦争は、小国間の紛争、あるいは、米国、ロシア、中国が、大国主義的権威主義の発想から、周辺国を武力で威圧し、従属させようとした軍事活動がほとんどです。

例えば、上記の様な形の軍事行動ないし軍事力による威嚇を、米国は、ベトナム、グレナダ、イラク、アフガンに、ロシア(旧ソヴィエトを含む)は、フィンランド、バルト3



国、チェチェン、ジョージア、クリミアに、中国はチベット、ウイグル、香港に対して行いました。周辺国は常に大国の顔色を気にしながら国家として生き延びる術を探る必要に迫られています。日本も米国との安全保障条約に基づく同盟関係の中で結ばれた地位協定において、駐留米軍に大幅な活動の自由を認めることを余儀なくされています。同じ様に米国と地位協定を結んでいるドイツにおける米軍が、日本に駐留する米軍より大きな制約を受けていることを考えると、より一層日本側の従属ぶりがはっきりします。

*** 世界史の順行の最後の日**

2022年1月3日、核兵器保有国である米、英、仏、中、露の5カ国は、共同声明の形で「核戦争を防ぎ、軍拡競争や核の拡散を行わない」旨を明らかにしました。その中でまた「核戦争に勝者はおらず、決して戦ってはならない」、及び「核兵器は防衛目的に限定され、侵略戦争の抑止のために役立てられる」ことが確認されています。この声明は、明らかに、核兵器を全面的に禁止する条約作りを求める国際世論に迫られる形で出されたもので、平和を求める私たちはもっと自信を持っていいと思います。今年度中NPT(核拡散防止条約)の再検討会議及び核兵器禁止条約締約国会議の開催も予定されています。

*** 世界史の逆行**

文明の方向に動いていた歴史は、今年2月24日再び野蛮に向かって逆行を始めました。ウクライナに対するロシアの軍事侵襲が始まったのです。これは、いかなる理由があれ、明らかに領土の保全及び主権の尊重を定めた国連憲章並びに国際法に違反する侵略戦争で、今後、野蛮の方向で世界の歴史を大きく変化させかねない極めて危険な逆行現象だと言えます。

米国を中心としたNATO諸国によるウクライナの軍事支援があって、代理戦争の様相も呈しており、場合によって第3次世界大戦に発展する可能性も全く無いとは



言えません。米国はウクライナの要望に応じる形で、より射程の長いミサイルを供給する動きを見せていて、ロシアにとって戦局が著しく悪化する方向に戦争が発展すれば、ロシアがNATO諸国に攻撃を拡大する事態も無いとは言えません。

さらにプーチン氏は核兵器の使用をちらつかせNATO諸国を牽制していて、単なる脅しであったとしても、これはタブー破りの許し難い発言です。原発周辺で激しい戦闘が行われており、原発が被弾する事態も想定され、原発事故による放射能汚染の危険も考えられます。ロシアは拒否権を認められた安全保障理事会の常任理事国で、国連は機能不全に陥ってロシアを実効性のある形で断罪することができません。ロシアによるウクライナ軍事侵攻は、現在のシステムが国際法を犯した国が大国である場合、全く機能しない現実を露呈させる結果となりました。

*ウクライナ戦争の理想的決着点と現実

理想の解決の道は、ロシアが軍を撤退させ、ウクライナが戦闘を停止し、グテレス国連事務総長の仲介の下でプーチン氏とゼレンスキー氏が話し合うことでしょう。しかし現実はかなり違っています。ロシアは国際世論(非難、制裁)を無視して戦争(占領、爆撃)を止めないし、ウクライナはロシアを追い出すまで戦い続けるつもりです。欧米側もロシアが戦争を続ける限り、ウクライナを軍事、経済、人道の面で支援し続けるつもりで、今の所この戦争は長期化する可能性が高い様に思われます。

*戦争終結の3つのシナリオ

1:ウクライナは徹底抗戦によって、最後にロシアを国外へ追い出す。この場合、懸念されることは、ロシアが最後の悪足掻きで核兵器を使用することです。

2:ウクライナが再起不能な状態に叩きつぶされる。この場合、ロシア自身も大きな犠牲を払い、軍事的、経済的に疲弊するが、ウクライナを完全に属国化するでしょう。

3:ゼレンスキー大統領がこれ以上の破壊と殺戮を止めるために白旗を上げる。この場合、ウクライナは一步後退して、次世代に未来を託することになるでしょう。

*白旗反対論 命に優る正義無し

第3のシナリオ、白旗を上げるという考えは評判の好いものではありません。人々があげる反対理由は以下です。住民の虐殺などロシアの暴力は止まらない。国が滅ぼされても構わないのか。無法で侵略国家ロシアに屈服することになる。

白旗を上げることは、まず自分たちは攻撃しない、戦わないという意思表示です。その意味は、犠牲を少なくして、次世代に未来を託すことにあります。命を失えば、何もありません。生き残った人には再出発の機会があります。たとえ、ロシアの傀儡政権の樹立と国土の占領があっても、生き残って、ゲリラ戦を試みるか、非暴力的抵抗(サボタージュ・ストライキ・非協力)を試みる事ができます。もし太平洋戦争で、日本がもう少し早く降伏していれば、広島、長崎の原爆投下はなかったでしょう。沖縄戦も、ソ連の満州侵攻もなかったでしょう。

*国権主義か? 私権主義(民権主義)か?

ウクライナの武装抵抗は国家の意志、大統領であるゼレンスキー氏の命令によるものです。国のために戦うのは正義で、人々は自分が暮らす国のために戦う義務があると考えるのは、国権主義の考え方です。それに対して国家ではなく個々の人々を中心に考えるのが、私権主義ないし民権主義の考え方です。個人の自由、人権を重視する国家もあれば、中国の様に国家の利益を最優

先する国もあります。

国権主義の立場に立てば、国のために戦うことは正義であり、義務であるでしょう。しかし民権主義の立場では、国のために戦うかどうかはあくまでも個人の意思、選択の問題になるでしょう。ウクライナにおいても、武装抵抗に参加しない人、参加できない人がいるはずで、こうした現実にはメディアの側に規制が働いてなかなか報道されません。

* 今後、採るべき方向

国連の改革が必要です。まず何よりも、国連総会決議を安全保障理事会の決定を上回る「最高の意思決定」とすることです。現在では、最高の意思決定機関は安全保障理事会では、常任理事国が拒否権を持っているために、特に今回の紛争の様に常任理事国の一つが紛争当事者である場合、公正な意志決定が行われません。そこで総会で以下の決議を行い実行できるようにする。

決議1:事務総長をリーダーとする国連代表団を派遣してロシアとウクライナに戦闘を中止させる。

決議2:核兵器の先制使用の禁止、核施設の安全確保を確約させる。

* さて日本は、日本の現状

日本は第二次世界大戦後、平和憲法を制定し、他国を侵略しないと宣言し、経済や社会の発展に専念して、武力行使を行わなかったことで、国際的な信頼を得る国となりました。日本は、敗戦後、戦争をしない国として発展を遂げることで、かつて太平洋戦争において占領、植民地化したアジア太平洋地域の国々に安心感をもたらしました。他国から占領された歴史を持つ中東諸国でも、日本は信頼できる国と見なされるようになっていきました。その結果、日本は、これまで国連の安全保障理事会の非常任理事国に12回も選出されています。

残念ながら、ロシアの軍事侵攻が始まって以降、政府は防衛力強化のために軍事費をGDP比2%に引き上げることを目標に掲げました。現在、日本は改憲勢力が衆参で3分の2以上の議席を占め、憲法を改正し軍拡路線を進め、全く別の国になる恐れがあります。敵基地攻撃能力を国防の前提と考え軍事力を強化すれば、防衛議論はやがて潜在的な脅威を取り除くために、攻撃の意図が疑われる国を先制攻撃するといった方向に発展する可能性もはらんでいます。このままでは、日本は国境を越えて他国を侵略する国になりかねず、近隣諸国は目下心配しながら日本の動きに注視しています。

* 憲法改悪の危険性 民主主義の危機

問題は憲法が具体的にどう変えられるかということ

す。自民党の改憲案では、緊急事態条項を設けて、政府が緊急時と判断すれば、一時的に「立憲的な憲法秩序（人権の保障と権力の分立）を停止し」、「政府に非常措置を取る権限を与える」ことを考えています。これは使い方によって大変危うい事態を招きかねないものです。私たちは、ナチスが独裁権力を掌握するために、同様の法律を悪用した歴史を忘れてはなりません。その他、自民党は、第9条に自衛隊条項を書き加えることを予定しています。

民主主義の根幹が危うくなる事態が現実となりかねない恐れがあります。秘密保護法、安全保障法、共謀罪、経済安保法、これらは何れも運用次第では民主主義の根幹、主権者である個々の市民の権利を侵害する悪法となる危険を孕むものです。若者の政治教育の必要が叫ばれながら、「政治的」と言う言葉を使って、踏み込んだ本物の議論が事実上回避される傾向があります。日本社会には元々、異論、異質なものを嫌う傾向があります。特に集団、組織の中では、直ぐに同調圧力が生まれます。政治がこの様な傾向に便乗して悪用すれば、ファシズムに導かれることにもなりかねません。私たちは本心に注意する必要があります。

* 軍事力ではなく、人間力で危機を回避する 慌てない！諦めない！

個々の人間の生命、生活、権利を守ることを最優先に考えることが必要です。国際紛争も軍事力に訴えるのではなく、人間力によって、つまり話し合いによって解決する強い決意が求められています。平和の基礎は、人と人の交流、友好によって作られるものです。私はいつも「ピカソで平和を守る」：非武装都市宣言を訴えています。個人的には侵略者には非武装、非暴力、不服従で対抗します。

世界史は「順行」と「逆行」、「文明」と「野蛮」のジグザグを繰り返して来ました。しかし長い目で見れば、「平和」、「文明」が優って来たと思います。現在は一步後退（逆行）の時期ですが、また必ず前に向かって進み始める（順行）はずで、世界は一気に変わりませんが、粘り強く平和主義、民権主義の尊重を訴え続けることが重要です。

最後に、世界と日本がこの様な状況にあることに対して、シニア世代として個人的に責任を感じ、反省の言葉を申し上げておきます。

<講演者との質疑、意見交流>

(質問・意見)

* “星の会”のメンバー。「宇宙から地球を見る」という立ち位置に共感を覚える。人類は宇宙の中で唯一無比の素晴らしい星、地球を守る大きな課題を与えられている。いま地球温暖化という問題の解決に全人類が力を合わせる必要があるのに、人々は愚かしい争いばかりしている。極めて残念。教育の果たす役割が大きいと思う。

* 今回のウクライナの戦争で、ベトナム戦争に反対する運動をしていたことを思い出した。「白旗を上げる」という考えが理解できない。ベトナムは戦って独立(北ベトナム)を守るとともに、国家統一(南北ベトナムの統一)に成功した。ウクライナはベトナムと同じ様に攻められた立場で、ウクライナが戦いを止めれば、ロシアの支配を受けることになる。

* 私は非武装中立論。攻めて来る者がいた場合、個人として不服従で抵抗するという考えに共感する。命が一番大事。殺し合うよりも白旗を上げる。戦争をしてはいけない。

* 歴史は確かに行ったり来たり。今年G20の議長国を務めるインドネシアのジョコ大統領は、ロシアのプーチン氏とウクライナのゼレンスキー氏の双方と会って仲介を試みた。平和への動きは存在する。東チモールはインドネシアに対する武装闘争などを経て、住民投票で独立を決め、武力紛争を終わらせた。

⇒池内:環境問題は発言の様に地球の危機です。若者たちの運動が世界的な拡がりを見せましたが、気になることは、温暖化防止を訴えて立ち上がった若者たちから、戦争反対の声が聞こえてこないことです。戦争は資源の途方もない無駄使いです。こうした資源(お金や物資や人の知恵)を本来なら環境問題の解決に投入すべきでしょう。

ベトナム戦争の場合、確かにベトナム戦争反対を訴える



運動はあったが、ベトナムの人たちを支援する活動はなかった。非武装白旗論の立場で考えてみましょう。仮定の話ですが、ベトナム

は非武装、不服従で抵抗してどうなったでしょうか。時間は長くかかったとしても、結局、ベトナムは独立した統一国家になりえたのではないのでしょうか。

ウクライナ戦争は今のところウクライナ領内で行われていますが、戦争は常にエスカレートする危険を孕んでいます。東チモールの独立は国連の仲介で実現したものであると認識しています。遺憾ながらウクライナ問題では正にその国連が機能していません。

(質問・意見)

* ロシアのウクライナ侵略の原因がはっきり分からない。原因が分からないと問題は解決しないのか。

* 東チモールの独立では、オーストラリアの策謀でインドネシア系の住民の多数が無視された。戦争はもうかるから起きる。戦争の背後には戦争で儲ける人がいる。最近あった南太平洋のフランス領ニューカレドニアにおける独立を巡る住民投票は、フランス系住民だけが参加した正当性に疑問のあるものだった。

⇒池内:ロシアのウクライナ軍事侵攻の理由は何でしょう。色々な理由をあげることができますが、ロシアの侵略はいかなる理由をあげても正当化できるものではありません。それがまずこの問題を考える前提です。プーチン氏はNATOが約束に反して東ヨーロッパに拡大したと主張しています。しかし過去を蒸し返してもどうにもならないでしょう。現状から出発して考えることしかできません。当事者同士が現時点で停戦して話し合うしかありません。

東チモールではインドネシアの武装組織による虐殺がきっかけで、主にオーストラリアの発議で国連が介入し、インドネシア政府に住民投票を認めさせ、投票の結果、独立派が多数を占め、最終的にインドネシア政府も受け入れ、平和的に解決したと理解しています。

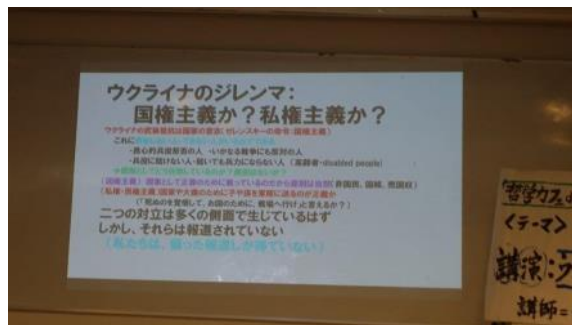


(質問・意見)

*世界各地で紛争が起きている。環境問題などもっと重要なことがあるのに残念な事態である。ウクライナ問題ではロシアは侵略者で、正直、心情的にウクライナに勝って欲しいと思う。国連が仲介して解決する考えに賛成である。若者たちの憲法に対する思いは余り強くない様に思う。若者たちにもっと日本国憲法を守る努力をして欲しい。若者に働きかける必要がある。

*研究者は資金繰りに苦慮している様に思われる。そのためか、東工大と東京医科歯科大学の合同の話が出ている。防衛力強化を口実とした軍拡には反対であるが、非武装の考えは国民の多数の支持を得られない。

*ウクライナはもともとまとまりのない国である。一つの国であることに無理があるのではないか。西部はカトリックで、東部は正教会でロシア系も沢山いる。立場の違う人が多過ぎて民主主義は機能しない。



⇒池内:国を分割すれば問題が解決する訳でもないでしょう。異なる要素を排除できるほど完全な住み分けがなされている地域は存在しません。地域ごとに違いがあり、地域内にも違いがあります。問題は話し合って双方が受け入れることのできる妥結点を見つけるしかありません。激しい内戦のあったボスニアでは国を分割せず、対立した三つの勢力が共存する道を選択しました。

<講演・討論の最後に> 主宰者・吉田千秋

まとめではなく、感想を述べて締めくくりとします。

私たちは国家に絡めとられない人間になる必要があります。国家は人々のために存在します。人々は国家のために存在する訳ではありません。それなのに国家はしばしば民をないがしろにし、悲劇を引き起こす困った存在です。ウクライナの人たちも、政治、国家の論理に振り回されています。

2014年、独仏の仲介でロシア、ウクライナ4国で、東部のドンバス地域に自治を認めるという内容のミンスク合意が成立しました。ウクライナ(ゼレンスキー大統領)はこれを守る努力が足りなかったと思われませんが、ロシアの侵攻は正当化できません。

なにより命が大事です。人と国家は簡単に一体化できるものではありません。今日は池内さんの話からも、その

ことが明らかになったのではないのでしょうか。これからも若者が生き生きと生活できる社会を実現することをめざして、私たちができることは何かを考えて行きたいと思います。例会の方にも参加して頂けると幸いです。本日はありがとうございました。



＜「14周年記念講演&討論会」例会 感想・意見など＞



○本日はありがとうございました。平和を考える時、何から考えて行動したらよいか戸惑う者ですが、池内先生の中日新聞コラム「時のおもひ」をかかさず拝読して励まされています。非武装論者の一人として。

(井上久美子)

○非武装による侵略への抵抗・「非戦」が大切だと改めて思う。同時に、国家(政府)の役割は何か、いろいろ考えさせられた。ウクライナの件で言えば、ゼレンスキー政権の言い分は正しいのか、もちろんプーチンも、両者のプロパガンダを見極める力が必要のようだ。

(井川敏郎)

○日本の現状分析など、知らないことを示して頂き、今後のものの考え方に生かしていきたいと思います。たいかに大きな考え方をしないと行けないと思っています。

(石崎正博)

○池内さんの明快なお話に納得しました。様々な意見に対してまずは受け止めながら、ご自身の意見を述べられる姿勢は学ばなければならないと思いました。「命どう宝」を国是にすれば世界は幸せになりそうです。

(魚次龍雄)

○日本は国家予算で軍事費よりも、食糧安保のために、食糧自給率アップのために、中長期的計画的に支出すべきだと思います。

(奥田孝道)

○今回の講演会に参加させていただいて、改めてウクライナ侵攻は他人事ではないことを実感致しました。まず、戦争に関する世界史は「順行」と「逆行」の繰り返しであること、そして日本を含む世界中の国々が今後、ウクライナとロシアの紛争を発端として、戦争に巻き込まれる可能性があるように思われました。

そこで、今後、日本がどのように戦争を回避して、平和的に世界の国々と争わずに紛争を解決できるのが重要に感じます。それには、何よりも正しい歴史認識が

必要だと思われます。その点について、わたしが疑問に思っているのは、日本国憲法の草案及び戦後の日本の歴史教育にGHQがかなり強い影響力を日本に与えていたことです。ですから、真実の日本の歴史を学ばない限り、今後、このような混沌とした世界の情勢を、どう正しく認識し、行動し、乗り切っていくのか、判断が難しくなると思います。

(瀬戸口佳代)

○とても有意義な時間を過ごすことができました。ありがとうございました。私は、現在、愛知県大府市に住んでいます。当日もそこから岐阜県の会場に行きました。池内さんから今回学んだ事は、「慌てず諦めない」ことです。

歴史的世界情勢に関しては知識不足なのであまり言及はできません。「非武装非暴力の精神」「命に勝る正義なし」の言葉も私の心に響きました。しかし、目の前の現実、おおよそそれには程遠い感じがしてなりません。若者達は明るい社会を見ないまま大人になっています。こんな社会をつくった大人達は何も改善せずそのバトンを子ども達に渡そうとしています。机上の解決策ばかり上がってもそれを行動に移す数が圧倒的に少ない感じがしてなりません。

慎重にするあまり何も出来ない。早急に何かしないと手遅れになる危機感を皆が感じています。それでいて、「慌てず諦めない」精神を貫くのは普通の人にはかなり難しい事でもある私は思っています。大局的な視点が必要だと思いますが、未熟な私にはまだその域に達していないようです。しかし、諦めない気持ちはあります。何とか生き抜いて明るい未来を見届けたいです。今回は、ありがとうございました。

(瀬戸口康樹)

○池内先生の講演は、丁寧にレジユメがまとめてあったので、聞きやすかった。また、討論の時間も多くとってあり、一方的な講演にならず、ある程度意見交流ができてよかったですと思いました。

先生は講演の中で、マスクミの問題も取り上げられ





て、マスコミが正確に事実を伝えているか注意しないと
いけないと言われました。これは全く私も同感で、日本
のメディアは基本的に欧米の流す情報を無批判に流し
ていると思われるので、このウクライナの戦争について
もゼレンスキー政権寄りの情報しか日本には流れてきて
いないのではないかと疑っています。例えば、2014年の
マイダン革命の後のウクライナ政府軍による東部ドンバ
ス地方の2州への攻撃で13,000人以上が殺害されてい
る事実はしっかりと報道されているのでしょうか。どのよ
うな紛争や戦争を見る時も、それを見る側がどのよう
な事実を知っているのか知らないのかで、ものの見方は
大きく変わると思いました。(岩間龍男)

○ZOOMの講演はパワーポイントだけが画面に映されて
いましたが、池内了さんの講演の姿が画面に映し出され
ませんでした。池内了さんの姿も画面に映し出されたほ
うが良かったのではと思います。

ロシアのプーチン大統領によるウクライナ侵略戦争を
早急に止めてほしいものです。池内さんの話された白
旗は絶対に掲げるべきではないと思います。理由はウク
ライナがロシアに屈服することになるからです。絶対に
屈服してはいけないと思います。(水野恵司)

○順行と逆行という言葉がよく出てきました。民主主義
ではとくに国民の支持がないと戦争行為はできない。
だから為政者は始めに私(国民)にウソをつきます。私
(国民)はウソにきつき、騙されないよう日々気をつけて
いること。(為政者は、十二分考察をして、私(国民)にウ
ソをつきます。)

あやうい言葉や行為に気づいたら仲間に知らせるこ
と。為政者のオレオレ詐欺に騙されて逆行を容認しない
よう、私(国民)が清貧であることだとあらためて気づき
ました。(こうこうぶん わへい)

○池内先生の平和主義は、日本国憲法がつくられた時
点での理念、すなわち軍事力に頼ろうとする流れを一
切断つ、究極の国際平和の追求だった。長い未来を考え
る時、それが大原則にならないと世界から戦争をなくせ
ないことは明白だが、今日の現実はその根底から

覆っている状況にある。

今次のロシアによるウクライナ侵攻がその典型で、今
こそ平和の原点とは何かを確認すべきだが、一方でとり
あえず妥協しながらでもそこに到達する道筋が示され
ないと、悲惨な現実が開示されないし、展望も見えな
い。

その方策の一つとして、国連が「平和維持」機能を回
復し、一刻も早い停戦の実現に持ち込むべきとの提案
は、大変重要な指摘だ。がこれも、安保理の常任理事国
が平和の破壊者になっている現段階では目途も立たな
い。

八方塞がりの中、過去を振り返ると、1980年代後半西
ヨーロッパを中心に「核の冬」拒否する反核運動が大き
く広がり、中距離核ミサイルを全廃し撤去させる米ソ間
の1987年の合意(INF条約)に繋がったことが思い当た
った。冷戦終結前の当時と今とでは大きな違いがあるが、
「気候危機」を拒否する運動と反戦・反核の運動が結び
つくことで、流れを変えられないものだろうか。

(フィリピン・ウォッチャー)

○池内先生のお話は、中日新聞でもよく紹介されてお
り、物理学者らしい、モノの本質を突いた内容ではなか
ったかと思います。2月以来のロシア軍によるウクライナ侵
攻と一般市民の犠牲を見るにつけ、絶望的な気分にと
陥るこの頃である。ここまでくると、理由は何であれ、一端
戦争が始まれば、国家権力同士の意地の張り合いとな
り、いつまで続くのか、収束点が見いだせない。この戦
争を見ても、正義の戦争なんてありえない。「国権主義」
より人命を最も大事にする、「人権主義」の考え方に共
感する。

さて、日本国民は「普段の努力によって憲法九条を守
り続けることができるのか、日本が戦争に巻き込まれる
ことを防ぐことができるのか」、これからが正念場では
なからうか？(MS)

○この侵略戦争を早く終わらせることは当然で す。そ
の一つとして、底へ至るすじ道を考えあうことをしてい





くことではないでしょうか。地球は宇宙で奇跡という「御伽噺」もよいが、自分なりに普段(不断)の努力をしていくことでしょうか。

ほとんどの戦争・紛争(ベトナム、湾岸..)は 理不尽な「理由」で起こし、多くの無辜の人たちが命や生命・財産を奪われてきました。それに対してさまざまな取り組みをしてきた ことを確かめあうことではないでしょうか。しかも国や国際社会を動かして来ていることにも目を向けることも重要と思います。

世界の動きも、周りもさまざま、複雑ですが 自分(たち)のより良きものをめざしていること から話も深まるのではと。(のぐち)

○1962年の核戦争になれば人類滅亡かとも言われたキューバ危機の事を思い出した。どの道敵味方の区別なく死んでしまうような事態になるならば、「戦争に反対、核兵器の使用反対」と言い続けて、事態の進行を待つより仕方ないだろうと周りの人たちと話合っていた。

ロシアのウクライナ侵攻に際して この講演では 国際的な平和への歴史的な努力過程での約束ごとや条約が整理されて取り上げられ レジューメもわかりやすく問題が良く理解できた。(アダム・スミス)

○今回の講演に関しての最初におやっと思ったことは、テーマにウクライナ侵攻と書かれていたことです。ウクライナ侵略ではなくウクライナ侵攻と表現されていたことには、この事象はロシアが100パーセント悪いのではなく、雑な問題を抱えているのだという演者の意図を感じました。

交通事故の過失割合に喩えるならば、過失割合はロシアが7割でウクライナが3割ぐらいかなと思います。ロシアの過失はその帝国主義的な行動、ウクライナの過失はミンスク合意を履行していないこと、そしてアゾフ大隊という言葉で示されるようにゼレンスキー政権というのは極右のおかしな政権なのではないかなどです。

講演を聞いていて自分の認識と異なる部分は多々ありましたが参考になることも多く、特にマスコミの大本営発表を常に疑って事象を考えることが必要という意見には激しく共感、賛同します。ウクライナ問題に限らず、統一教会や電通に関する問題でも同じ事が言えるなと思いました。(たなか)

○このところ「旧統一教会」の話題でいっぱい。岸田政権は国民が求めてもいない内閣改造を急いで「旧統一教会とは関係がない」と第2次内閣を発足させたが結果は逆効果のようだ。

皆さん、不思議だと思いませんか？ と言うのは、世の中全体が必死に「旧統一教会はダメだ」と「旧統一教会との関係を全く否定」(表面上?)しようとしています。しかしその団体と最も関係の深かった安倍元首相の「国葬」はなぜ否定しないのか？ これはとても矛盾した不思議な話ですよ。

安倍首相は「旧統一教会」が宗教の根本を間違えた方向にあるのを見抜くだけの見識もなく、国葬に相応しくなかったと言えます。以上のように「旧統一教会との関係を全面的に否定する」のであれば安倍元総理を「国葬」にするのも全面的に否定すべきです。野党もここは反対しても大丈夫です。我々市民は野党やメディアと一緒にこのシンプルな論法で、安倍元首相の国葬」を止めましょう。子どもや孫の将来のためにも。(井口)



<この一本>

早川千絵監督画「PLAN75」 2022年6月公開

冒頭のシーンが相模原津久井やまゆり園の殺傷事件を思わせる。暗闇の中血の付いたナイフを持った人の姿。意思疎通のできない重度の障害者を「不幸かつ社会に不要な存在」と言うのが殺人の動機だと言う。生産性の無いものを排除する発想を示唆している。



75歳以上から生死の選択権を与える制度、「PLAN75」が国会で可決される。この制度は75歳以上になると加入することが出来て、電話での生活相談などの支援を受け、自分で死ぬ日時を決めることが出来るというもの。入会は自由なのだが見ていると制度の宣伝は入会が当然と思わせるのだ。

夫と死別、独りで暮らしてきたミチ(倍賞千恵子)は年齢を理由に仕事も話し相手も失い「PLAN75」に加入を決意する。一方、市役所で入会の説明、受付の職員、会員の生活相談、悩みに電話で相談に応じる職員が、この制度の存在に疑問を持ち始める。ミチの電話相談に応じているうちに、一度会いたいと言うミチの願いに禁止されている面談に応じてしまうコールセンターの女性も、ミチが最後の日を決めてお礼の電話が入り動揺する。

ミチの死の床の横に窓口担当の職員の叔父が横たわっている。放っておかなくて遺体を引き取りに来た彼を見て、ミチはガスマスクを外して街に出る。どうするのか分からないが生きたい言う思いが伝わってくるラストシーン。映画の世界ではない現実味を帯びていて戦慄を覚える。

(岩田たかこ)

<この一本>

K・バラゴフ監督「戦争と女の顔」
(2019年制作ロシア、2022年公開)

この映画はノーベル賞受賞作家、スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ著『戦争は女の顔をしていない』(三浦みどり訳 岩波書店 2016)に着想を得て作られたものだが、脚本は監督(K・バラゴフ)のオリジナルというだけあって、原作とはまったく異なったものとなっている。



原作は、ナチスドイツに対する戦に志願した女性兵士の戦中戦後の姿をインタビューによって明らかにしていくのだが、同じ志願兵であっても帰還後の状況が性別によって大きく異なっていたことが浮き彫りにされ、読み手に大きな衝撃をあたえたのだった。

映画では焦点を当てられているのは二人の元女性兵士のPTSD(心的外傷後ストレス)である。舞台は、独りの戦場となり荒廃きったレニングラード。PTSDに苦しみつつ傷病軍人の看護をしているイーヤ。イーヤに子どもを預けて戦地に赴いたマーシャ。帰還後、イーヤを訪ねたがそこには子どもの姿はない。子どもが欲しいマーシャはイーヤにある提案をする。映画では負傷して全身不随になってしまった男性兵士も登場する。夫の生存を知った妻が訪ねてくるが、夫は家族のもとへ帰ることは望まず…

原作で強烈な印象を与えたところは、この映画ではごくサラッと触られているのみで、個人的にはやや物足りなさを感じたが、監督の狙いはむしろ別のところにあったようだ。

(ないものねだり)

哲学カフェ 第28期(2022年後半)例会予定 *毎月第2木曜日、午後7:00~9:00 ふれあいスペース

⇒ コロナ警報で中止の場合あり、テーマも変更あります。連絡下さい。

第170回例会 8月11日 (木・祭)	「開設14周年記念」講演・討論会 午後1時30分~4時 * 3年ぶりに記念行事を開催。8月11日(木・山の日)、午後。長良川スポーツ * 講演は池内了先生(名古屋大学名余教授・宇宙物理学)←4年前に続いて。 * テーマは「ウクライナ侵襲から平和を考えるー歴史の順行と逆行ー」	終了 しました
第171回例会 9月8日(木)	「いじめはなぜ起きるのか、どうしたらなくせるのか？」 * 子どもの世界でも大人の世界でも様々ないじめが次々と起きている。 * なぜいじめは起きるのか。どうしたらいじめはなくせるのか。あらためて考えてみよう。	
第172回例会 10月13日(木)	「信教の自由と政治的利用の問題を考える」 * 旧統一教会(協会)と自民党などの関係で浮き彫りになった宗教と政治の危うい問題。 * 宗教活動も無制限ではなく、不法な反社会的活動は罰せられる。この点が重要です。	
第173回例会 11月10日(木)	「戦争危機と気候危機、どうつなげて打開するのか？」(仮) →テーマ寄せて下さい。	
第174回例会 12月8日(木)	「危機の時代2022年をふりかかって」(仮) →テーマ寄せて下さい。	

哲学カフェの運営資金の協力も、よろしくお願ひします。

口座記号・口座番号 00810 1 142912

加入者名 哲学カフェ de ぎふ、千秋まちかど文庫

「哲学カフェ de ぎふ」ホームページ 毎回更新中 !!

<http://tetsugakucafegifu.jimdo.com/>

右のQRコードをスマホなどで読み取ると、「哲学カフェ de ぎふ」のホームページが開きます。ぜひ閲覧願ひます。友人・知人に拡散いただければ幸いです。



わいわいがやがや



★まだ暑さの続く中、秋レタスの種を蒔いた。スチロールのトレーにキッチンペーパーを敷き、それを冷水で湿らせ、小さな細長い種をパラパラと上に散らした。これを冷蔵庫で4~5日保存すると、白い数ミリの根や芽が出てくる。それをピンセットでポットの土に移し苗を育てる。これが「休眠打破」と呼ばれる方法だ。

★7月の参議院選直前に起きた安倍元首相に対する銃撃事件で、容疑者の犯意の大本に、統一教会による霊感商法への恨みがあったことが明るみになった。この信者をマインドコントロールして高額な寄付を迫り、時には家庭崩壊さえ起こすやり口は、1980年代まではメディアも大きく取り上げ、国民の警戒心も高かった。が、それ以降は「休眠」状態になっていたという。

★それが事件を機に、期せずして「打破」されることになった。休眠中に問題の教会は件の悪徳商法を繰り返すとともに、自民党などの保守政治家に接近し、「認知」と「お墨付き」を得るようになった。挙句の果ては、多数の信者が彼らの選挙を無償で手伝って貸しをつくり、反共政治の強化という見返りを画策してきた。

★最近原初の仏教を研究する植木雅俊さんは、釈迦の教えは男女の徹底した平等が説かれていたが、その後の教団の形成過程で、男尊女卑が入り込み、性差別が教理にも取り入れられた、と解説。ドイツ文学翻訳家の池田香代子氏がWeb番組で紹介している。

★私のような無宗教の間人は、神仏の話になると「あーそうなの?」、「それ以上は…」と早々に身を引いてしまう。が、どうもそれでは宗教に向き合わないままになってしまう。社会問題に対しは、隙間や休眠はつくらない方がいい。

(大橋健司)